



「教育資金をどう準備すればよいのか？」

(前編)

自分以外のFPがどのようなお客さまの相談に乗っているのかわかる機会は意外と少ないのではないだろうか。それならば、編集部員が実際に相談を受けてその様子をレポートしてみよう、ということから始まったのがこのシリーズ企画である。第1回目のテーマは教育費。相談に乗ってくれたのは、なごみFP事務所の竹下さくらさんである。

私事で恐縮だが、昨年の夏、長男が生まれた。初めての子育てに私と

妻はてんでこ舞い。あつという間にハーフバスデーを迎え、家族3人での生活リズムをつかみはじめたころ、妻が私にこう問いかけた。「この子の教育費、どうやって準備するか考えてる？」

聞くところによると妻は、長男を抱えて街を歩いていると、「学資保険には入られていますか？」と、保険会社の方に頻りに声をかけられるのだという。その都度「(夫が考えているはずなので)大丈夫です」と丁重に断っていたそうだが、声をかけられるにつれ、本当に大丈夫なのか不安になったようである。

もちろん私も、ほんやりとは考えていた。ただちょっと先送りしていただけ

である。そんな私を疑わしそうな目で見る妻。気のせいだろうか、長男も私の目をじっとのぞき込んでいる。私は、わが家の教育費を真剣に考えてみることにした。

子ども一人につき、大学卒業までにかかる教育費は1000万円とも2000万円ともいわれる。目安はいくらで、どのように準備すればよいのか――。

そこで私は、弊社から『親と子の夢をかなえる！』私立を指す家庭の教育資金の育てかた』を柳澤美由紀さんと共著で出版している、なごみFP事務所の竹下さくらさんに相談してみることに



竹下さくら ● たけした・さくら
なごみFP事務所・CFP®
損害保険会社(本店業務部門)および生命保険会社(引受
診査部門)に勤務後、FPとして独立、現在に至る。千葉
商科大学大学院のMBA課程で客員教授を務めるほか、主
に個人の相談・執筆・講演を行っている。

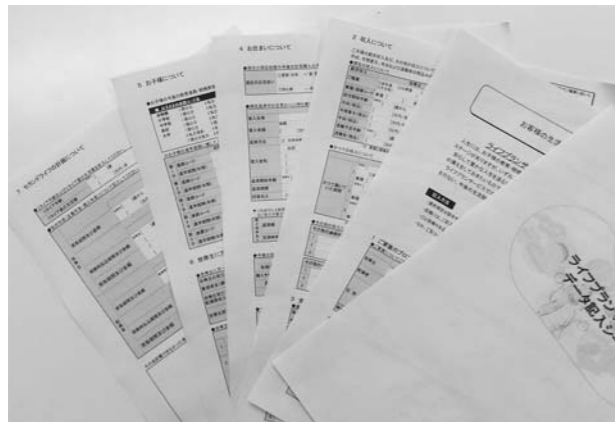
「住宅資金や老後資金にしわ寄せが来ないように注意することが必要です」

した。

※

2月某日、竹下さんの事務所を訪問。相談者という立場でコンサルティングを受けるのは、いささか気恥ずかしい。

今回相談するにあたり、竹下さんからは事前に、「ライフプランサービ
ス・データ記入シート」を渡されて
いた。わが家の家計の状況と今後の
のライフイベントを整理するための



事前に記入して持参した「ライフプランサービ
ス・データ記入シート」。収入
や支出、貯蓄、住まい、セカンドライ
フの計画などについての記入欄がある。

シートだ。記入しておいたそのシートを踏まえ、私は竹下さんの質問に答えていった。「まずはキャッシュフロー表を作成して、今後のおおまかな収支の流れを見てみましょう」

や生活費、住居費、その他の収入・支出や、今後のライフイベントについて丁寧ヒアリングを始めた。私が漠然としか思い描けていない項目については平均値を代用し、ライフプランの全体像を作り上げていった。私のように「教育費をいくらか準備すればよいのか」と悩んでいる相談者に対しては、このようにキャッシュフロー表を作成してみるのだそうだ。相談内容は教育費であるが、教育費は人生の三大支出の一つにすぎない。ライフプラン全体を見ずに教育費にだけフォーカスしてしまうと、残りの住宅資金、老後資金にしわ寄せが来てしまうこともあるからである。

「電卓を叩いてもらって金額が実感できるんです」

そうして話題は、メインの教育費へと移っていった。

保育料に加え仕事用の洋服代がかさむことも

子どもは6年間、保育園に入園するという想定だ。竹下さんは、東京都世田谷区の保育料が記されている

資料を見せながら、費用の目安を説明してくれた。

「認可保育園の場合、収入によって保育料は異なってきます。川崎さんの世帯年収で考えると、3歳未満までは月額約7万円、3歳以上になると約3500円が上乗せされます。奥さんの仕事用の洋服代や外食費が現状よりかさむことも、考えておいたほうがいいかもしれませんね」

ここで竹下さんは私に電卓を差し出し、6年間の保育料の総額を計算してみるように促した。相談者自身に電卓を叩いてもらうことで、金額の実感がわくからだという。ざっくりだが、3歳までは年間約90万円、3歳以降は約50万円の保育料がかかる計算だ。